



Contents

- P. 1 ワークショップの開催報告
- P. 3 有明海の「ビゼンクラゲ」ブームと研究
- P. 4 離任挨拶

ワークショップ「海とふれあう「集いの場」づくり」 開催報告

有明海では様々な研究が行われています。それら研究成果は研究者同士の情報提供で終わること無く、市民に対して発信し情報を共有するとともに、成果を生すべきです。しかし、単に「研究成果発表会」や「有明海再生に関するシンポジウム」のような方法では、実際に海に携わっている方々（環境アセス会社、漁業者、水産・海洋環境行政担当者など）が集うのみであり、より広い情報提供にはなっていないような気がしています。有明海沿岸地域（佐賀・鹿島）では以前から「有明海再生」に関するイベントは多いため、市民に飽きられているという話も耳にしました。このような状態では、これまで試みた方法は有効で無いでしょう。それではどのような情報提供が有効なのでしょう。今回は「海の情報拠点」を利用した方法について検討してみることにしました。即ち、市民が気楽に立ち寄れて、海の話が聞け、そのうち「海」に関して集える場の提供です。そのような場所として既存の施設を想定した場合、有明海のすぐそばに位置している「鹿島市干潟展望館」が挙げられます。そこで今回は「鹿島市」において集える場の形成に関するワークショップを企画しました。（次頁へ続く）



ワークショップのポスター

今回取り上げた「鹿島市」は、山と海を楽しむ「鹿島ニューツーリズム」などの自然とふれあう事業を展開し、有明海の活用を模索している地方自治体です。特に道の駅鹿島に併設している「鹿島市干潟展望館」は海における拠点となっており、この施設をこれまで以上に生かしていくには、どのような方法があるのかなどを議論する時期に来ています。また、鹿島市干潟展望館運営スタッフ自身もさらなる活動を広げるためには、市民の協力が不可欠であると感じているようです。

前述したような「海に関する集いの場」を議論する上ではどうしてもたたき台のようなものがが必要です。そこで今回は東北地方で活発に活動している水族館「もぐらんぴあ」の事例を取り上げることにしました。もぐらんぴあは岩手県久慈市にある正式名称「久慈地下水族科学館」という水族館で石油備蓄基地のトンネルを利用した珍しい施設でした。しかし、2011年3月11日に起こった東日本大震災の津波によって壊滅的な被害を受けました。様々な方の支援があつて、現在は久慈市街中に空き店舗を利用した「もぐらんぴあまちなか水族館」として開館しています。各地の水族館からの支援や地元の漁師さんから海洋生物を提供していただきながら他の水族館のように常時生物展示がなされています。もぐらんぴあはそれだけでなく、街の店舗に水槽を設置して生物展示をしてもらったり（街全体が水族館）、子供達とのふれあいを持つようなイベントの開催を行ったりと非常に活発に活動されています。「津波」の被害ということで住民が「海」から離れてしまうような状況にあるなか、大変な努力があつたのだと予想されます。NHK朝の連続テレビ小説「あまちゃん」の効果もあつてか、2年半で15万人の集客を達成しています。今回はそのもぐらんぴあで展示や企画の中心的な役割を果たしていらっしゃる宇部たみ子さんをお迎えしました。

ワークショップは2014年1月19日午前中2時間程度開催しました。はじめに私から開催趣旨について説明しました。次に宇部さんに震災の時の状況、地下水族館の状況、そしてまちなか水族館に移転してからの活動報告について写真を使って解説して頂きました。その後、参加者からの質問を頂きました。次に、鹿島市干潟展望館の状況について中村安弘さんに説明していただき、参加者とともに施設のあり方について考えました。この議論のなかでは一定の結論を得たわけではありませんが、参加者の頭に残る議論になったかと思

います。また、議論の途



写真：ワークショップの様子

中で太良高等学校や鶴岡市加茂水族館などの取り組みも紹介が有り、地域に対してよい情報提供が出来たのではないかと感じています。また、もぐらんぴあまちなか水族館応援団長であるさかなくんや久慈市長山内隆文さんからのビデオレターも上映され大いに盛り上がりました。

本ワークショップ開催日には鹿島市内で多くのイベントが開催されているなか、24名（但し、2時間の間に人の出入りが頻繁にあり、その総計です）の参加がありました。また、ワークショップの様子は鹿島ケーブルテレビのニュースで紹介された他、ワークショップの内容ほぼすべてが放映されたので、参加者人数以上に議論の内容が住民に伝わっているように思います。

年始のお忙しい中、佐賀にお越し頂いた宇部たみ子さん、ビデオレターを寄せて頂いたさかなくん、山内久慈市長、スタッフとしていろいろとお手伝い頂いた中村安弘さん、参加者の皆様に感謝致します。（藤井直紀）

有明海の「ビゼンクラゲ」ブームと研究

有明海では貝類などの水産業が低迷している中、「ビゼンクラゲ」がちょっとしたブームになっています。ブームのはじまりは2012年、ビゼンクラゲの大量発生が起こったことです。もともとビゼンクラゲは食用として漁獲されていましたが、それはごく少量でした。網漁をする上ではじゃまになりますし、ビゼンクラゲを「厄介者」と感じていた漁師は多かったらうと思います。しかし、中国業者の参入によって状況は大きく変わりました。これにより多くの漁師がビゼンクラゲを採りはじめました。漁法は海面に浮いているビゼンクラゲをたも網ですくい上げるといったもので、決して楽な労働ではありません。しかし、少しでも収入になるのならということで、多くの船が操業していました。

2012年の大発生時には加工・流通の対応が遅かったために漁獲時期も遅れ、9月初め頃から多くの漁師がクラゲ漁をいはじめました。それは12月まで続きました。翌年2013年はすでに流通体制が整っていたためにビゼンクラゲが出始めたと同時に採りはじめる漁師がいました。はやいところでは6月には本格的に漁獲をはじめていました。しかし、2013年は2012年のクラゲ発生状況と比べると圧倒的に少なかったのです。佐賀大学有明海観測タワーに設置している海面観察用カメラの記録を解析した結果、2013年のビゼンクラゲ発生量は2012年の半分以下だと推定されました。その結果、8月中旬には海面に浮いているビゼンクラゲは居なくなってしまいました。（次頁へ続く）



写真1： ビゼンクラゲ。海面に漂っているのをたも網で救い上げる



写真2： 網ですくい上げたビゼンクラゲ

ビゼンクラゲの現存量に対して「漁獲圧が高い」状況になってしまったわけです。以上のことはもしクラゲ漁を今後も続けたいならビゼンクラゲの発生状況把握体制の確立と漁獲調整体制を整える必要があることをしめしています。

有明海産ビゼンクラゲの生態学的知見は未解明な部分が多いのが現状です。水産総合研究センター西海区水産研究所によって六角川付近で多くのエフィラ（クラゲの幼生）が採集されているため、発生源は六角川河口だと推定されます。その後どのように拡散して有明海に棲息しているのか、どのようなタイミングでプラヌラ幼生が放出され、ポリプ・ポドシストに変態しているのか、また、ポリプはどこでどのように棲息し、クラゲをどのタイミングで遊離させるのか・・・わからないことがたくさん残っています。以上のビゼンクラゲの現状につきましては海洋政策研究財団が発行する「Ocean Newsletter 第324号（2014年2月5日発行）」に執筆しましたのでご一読いただければ幸いです。

また、2013年8月末には鹿島市において「有明海クラゲ類サイエンスツアー」と題したイベントを開催し、クラゲ解体ショーや観察会、シンポジウムを行いました。また、鹿島市干潟展望館等で研究ポスターを張り出すなど情報発信をしているところです。今後も、研究が進み次第情報を発信していきますので、ご支援・情報の提供をどうぞよろしくお願いいたします。（藤井直紀）



写真3： 佐賀大学有明海観測タワー海面観察カメラから見えるビゼンクラゲ

離任のご挨拶

片野俊也

この3月末日を持ちまして、佐賀大学低平地沿岸海域研究センターを退職することになりました。センター設立から4年間、有明海の研究を進めることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。センターの皆様とセンターを応援くださっている皆様に感謝しております。

有明海は、諫早湾潮受け堤防開門調査に関して、多くの訴訟が起きていて環境問題ではなく、もはや社会問題の様相を呈しています。有明海生態系の再生と有明海周辺地域の振興について、建設的な方向に議論が向かうことを願っています。

これから私は、当センターの発展を外から見守り、応援していきます。私は今後も有明海の研究に細々とかわっていきつもりですので、よろしくお願いいたします。

編集後記

編集をほぼ4年間行ってきましたが、今号が最後になります。いつも、ばたばたと編集作業を行っていて、編集に至らぬ点多くあっただろうと思いますが、これまで読んでいただいた方、ありがとうございました。（片野、左の写真）

発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846
ホームページ <http://lit.saga-u.ac.jp>
(平成26年3月28日発行)

